

秋のパラソル

『山茶花』

77-1号

うつろひて還らざる季のこほしさや日差しにひらく秋のパラソル

ほのかなる花の香伴なふやさしさよこの風にしばし身をゆらしぬ

鈍ければ鳥に生れても翔べずして地を這ふわれか今朝も草抜く

共白髪の語感は寂し打ち消してまた独り身の意識に甦る

街川の流れに沿ひて歩みゆくわれの最も素直なるとき

冬

『山茶花』

11-2
号

昨日より今日に生き継ぎ拭き終へし窓のガラスの透明がうれし

たまらなく今がいとほしく丘に佇つ今日を信じるほかなき夕映

みづからの意志にはあらね散り敷ける落葉の空疎いがに踏むべき

冬樹々の裸木となりしいさぎよさわれの未練は何も捨て得ず

既に冬かすか浮かぶは足早き雲の夕片のごとき夕月
かけら

冬の卵

『山茶花』

11-3号

まだ残る力ためさむと手に洗ふシーツの純白を空に眩しむ

揉み洗ふ綿のシーツのはためきを命と思ひ冬空に見る

縁に射す冬陽は父母の温かさ死後とて深き慈みにるる

このわれに如何なる終焉の待つならむ卵の黄と白器に頒けつ

たまらなく今がいとほしく丘に立つ身は夕映えにくるまれながら

裸木は枝のびやかに宙を指す怖れ知らざる青春と累なる

纏ふものなき裸木のすがしさや枝さしのべて宙に自在なり

とろとろと燃ゆる暖炉の炎あかりにわれの孤影のしばし耀ふ

山鳩の啼くあたりよりこぼれ来る春と思へば径の明るし

ふかふかと寝入りし春の午睡より醒めてしばらく方位喪ふ

冬の海

『山茶花』

11-5号

捨てにゆく塵芥ごみの量より着膨ふれて罪のごと又ひと冬を生きむ

それぞれに孤りを託つも会ひ寄らず遠き眸めをして海を見てをり

八十路なるわが分別は解されず茶房に味はふ珈琲の苦さ

深夜誰が流す水音のひそかにてこれの世ならぬ寂しさに聴く

唐突に定年後の案を切り出しぬ末の息子は既に若からずして

木瓜

『山茶花』

77-6
号

降る雨の霏と変り律義とも意地とも見せて木瓜の膨らみ

わが歌はまとまらずとも取じ敢へず声ととのへて鶯の啼く

猫にまで世辞をふりまき帰り来て渴ける唇のルージユを落す

くら

風にさへ抗へのわれが吹かれ来て縫らむ樹々も今はまぼろし

目分量にわれが焼く南瓜グラタン苾まで焦がすは誰へのジエラシー

向日葵の種子

『山茶花』

11-1号

さくさくと刻む朝あしたの春キヤベツ今は拘泥する何もなし

朝より風吹きわたるははつ夏よガラスは透明でなければならぬ

向日葵の種子ひとつ埋めて季を待つまだ暫らくは疎まれず生きむ

なかなか動かぬ雲にこだはりぬ極まるばかりのこの愚直さ

その天わかさ唯唯かなし今日ここにみ魂しづめの禱りは熟し

(伊東市慰霊祭献歌)

摘みとりし薔薇の花殻ことごとく茨に触れし指の創もつ

こころ团ざす身の貧しさを嘆くかな山苜の花散る坂道に来て

踏まれてもなほ立ち上り陽を及すひとところ群れて小判草の咲く

絵手紙のあぢさる一花みづみづとしとど溢れてわが胸濡らす

紫陽花の彩づくまでには癒えたしとふ人の便りの絶えて久しき

くちなし

『山茶花』

77-9号

梅子 はあまりにつよく匂ふゆゑ蹟く前のわがまち眩み

雨の日の匂ひ羞しきくちなしに傘さし懸けて純白に寄る

たちこむる朝露の中くちなしの純白は紛れやうもなく

掃きながらあとふり向けば又落葉余生と言ふも徒らに長し

移りゆき荒れたる庭の片隅にみやこわすれは忘れじと咲く

花の趣き

『山茶花』

77-10
号

緋のカンナ炎天に高々と咲きたり燃へたつものひらの抑へがたければ

ひと日花きききて愛しき白木槿ひとりのわれに浮かぶ夕月

ほそぼそと道端に立つ笹百合よ八月の風こころして吹け

からうじて重ねゆく齡か既にしてこの水溜り跨ぎ得ずなり

鏡面に向ふみづからに目を逸らす還らざるもの皆かなしくて

ひぐらし

『山茶花』

77-11 号

この夕べ亡き母恋ほし耳鳴りの混じりてひぐらしの声

風鈴をかすかに揺らす風の中送り火を焚く手に誰かがまつはる

しろじろと空わたりゆく夏雲の行く手定まらずしてわが意志も

夾竹桃熾烈に朱しいささかも懺悔うながさるる所以もなく

朝の陽にむらさき桔梗いろ冴へてことなき吾れに再びの秋

木犀の香

『山茶花』

77-12
号

穂すすきを自在になびかす風ありてしみじみ躰の重たさにるる

木犀の香はいづくより幸せは遠巻きに夕べわらをつつみぬ

木犀の散り敷く徑にためらふは黄金を踏むに似て畏るる

稚^{おきな}さの未だ残れる二十歳^{はたち}にて真珠のピアスの光る耳もつ

突然に逝きたる人の通夜の席三日後の約束はすでに反古